

# 改訂にあたって

この度、『はじめの一步の病理学』改訂版の発刊となった。

初版の「序」では、初めてこの本を手にする学生の皆さんに、まず、病気の山並みを眺め、大きな道筋をつける案内書になるよう、この本の企画、作成のコンセプトを紹介した。改訂においても、初版時の気持ち、姿勢は同じである。「どんなことが体の中に起きているのか、それが理解できれば、病気になっている人を見る目が変わってくるはずである」と書いた。病気を理解する、それは医療関係の勉強をしている皆さんにとって、病気で苦しむ人を理解するための一步になる。そして、この一步は病気の人に向かう一步であり、医療者としての重要な一步だと思う。

現在、医療と介護、病院と地域との連続的なつながりに目が向けられるようになった。病院の中だけではなく、病気を抱えながら働く人、病気とともに生活続ける人たちと接し、支援することを考えながら病気と向き合うことが、医療者に求められている。そこで、改訂版では老年症候群の章を独立させて、とくに認知症に重点を置いて病気の成り立ちを解説してもらった。また、代謝性疾患、代謝障害の記述を充実していただいた。いずれも、病気をもつ人の広がりについて考える助けになるだろう。

最近、さまざまな情報がネットを通じて、瞬時に目の前に現れるようになった。皆さんもキーワードを入力し、最初のいくつかの解説、コメントから情報を得ていると思う。いや、むしろ無意識に、空気を吸うように情報に接しているとも言えよう。大変便利で、いい状況である。しかし、皆さんも思っているように、自分の見方、情報の受け取り方を鍛えるトレーニングが必要である。それが、学校で学び、教科書と付き合うということだと思う。この教科書『はじめの一步の病理学』を読み通してもらうことで、執筆者の思いがそれぞれに伝わってくるはずである。

さて、医療系の学生の皆さんに、「病気とは何か」を考えるきっかけとなり、「病気を通して人を理解する」手助けとなることを願って、本書初版を世に送り出して5年が経過した。改訂版の出版に際し、適切なイラスト、肉眼、組織写真と、総論に重点を置き、簡潔で要点をついた説明が学生の皆さんに受け入れられたことを、執筆者の先生方とともに喜びたい。そして、皆さんには、すべての執筆者の声に耳を傾ける機会を、是非とも、作ってもらいたい。

2017年10月

深山正久